ハワイ日本人移民による日系宗教信仰の諸相
-ハワイ島コナの場合-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平川, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22022

文学研究論集
第 55 号　2021. 9

ハワイ日本人移民による日系宗教信仰の諸相
――ハワイ島コナの場合――

Aspects of Japanese Religious Beliefs by Japanese Immigrants in Hawai‘i : A Case of Kona, Hawai‘i Island

博士後期課程　地理学専攻　2017 年入学
平　　川　　亨
HIRAKAWA Toru

【論文要旨】

日本からの大規模なハワイ移民は 1885（明治 18）年に始まるが，1890 年代半ばから 1900 年代にかけて主だった日系仏教宗派がハワイで活動を開始し，日本人としての意識と結び付く神社がつくられた。また移民の生活に密着した民間信仰が彼らによって持ちこまれ，日本の新宗教も布教された。これらの信仰実践に関する研究についてみると日本人移民が多く定着した農村地域を対象にしたものが少なく，ハワイにおける日系宗教の相互関係に関する包括的な研究も乏しい。そこで本研究では日本人コーヒー農家が多数を占めたハワイ島コナを対象地域として，そこで展開された各日系宗教信仰の諸局面とそれらの相互関係を事例として，主に戦前の日本人移民の日系宗教信仰に関わる生活世界の一端を明らかにする。コナではまず浄土真宗と曹洞宗が活動を開始し，日本人移民の社会活動のひとつの基盤となったが，宗教的な役割の中心は葬祭と供養であった。ハワイ，特にコナでは現世利益を願う大師信仰が盛んで，それを基盤とする真言宗の活動のなかに移民から宗教者になる者や信仰治療を行う者の存在もみられた。またコナでは大師信仰者の多くが葬祭を他宗派に委ねていた。戦後の新宗教の布教は既成の日系宗教や民間信仰に交代を迫るものであったが，死者の埋葬が問題となり，葬祭と埋葬の実践こそが日系宗教信仰の根底にあることが明らかとなった。

【キーワード】日本人移民，日系宗教，民間信仰，信仰実践，ハワイ島コナ

研究論集委員会　　受付日　2021 年 4 月 15 日　　承認日　2021 年 5 月 31 日

1. はじめに

ハワイの日本人移民は，廉価な労働力として過酷なプランテーション作業と異国での不慣れな生活を強いられた。その苦しい生活の何らかの拠り所としての日系宗教の信仰は，彼らにとって重要な役割を果たしたと考えられる。移民研究会編（2008）「第 6 章 宗教」の冒頭には，「移民の文化変容，主流社会への文化的同化，あるいは生活史を語るうえで，宗教は欠かすことのできない重要な要素である」と述べられている。

日本の研究者によるハワイの日系宗教研究の代表的なものとしては，東京大学宗教学研究室が中心となっておこなった宗教社会学的な研究（柳川・森岡編 1979，1981）があげられる。そこでは日本人ハワイ移民の日系宗教信仰について，日系仏教や神道，民間信仰（大師信仰），新宗教などの研究がなされている。これよりのちの，1980 年代以降に日系宗教の研究が盛んになったとされているが（移民研究会編 2008：81），その数は決して多いとは言えない。また後述するが，それらの研究は既成宗教や新宗教の布教に関するものであり，信仰の実践者としての移民という観点を取り入れた研究は少ない。そして，その信仰実践に関する研究は，ホノルルやヒロなどの都市に限られており，日本人移民が多く定着した農村地帯の研究は柳川・森岡編（1981）以来乏しいままである。

そこで本稿では，戦前には日本人移民が地域住民の過半数を占め，彼らによってコーヒーの世界的産地となった農村地帯であるハワイ島コナ地域を対象として，日本人移民の生活に密着した日系宗教における信仰の実相をとらえることにしたい。そのため，日系仏教や神道だけではなく，日本の民間信仰や戦後の新宗教を加え，それらとの関係も事例として，主に戦前のハワイの日本人移民の日系宗教信仰に関わる生活世界の一端を明らかにするつもりである。

この研究にあたっては，実地調査によって収集した現地資料にもとづいて先行研究の検証をおこない，その他の日本語新聞記事，オーラル・ヒストリーなどを活用して進めていく。

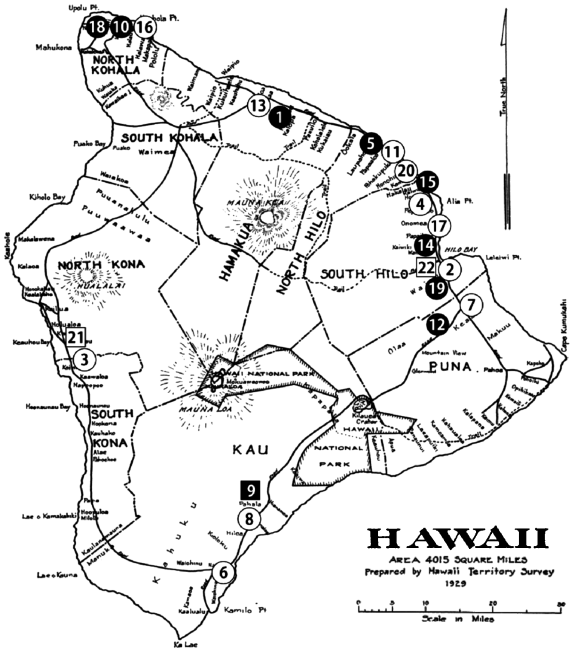
先行研究の柳川・森岡（1979）では，調査の途中報告としてハワイにおける各日系宗教団体の活動と歴史を記している。柳川・森岡（1981）では，コナにおける日系宗教の重複帰属を調査した真田（1981），移民地の神社神道研究の先駆けとなった井上（1981），民間信仰である大師信仰と真言宗の関係を論じた星野（1981），そして戦後の新宗教に関する研究として，日系女性の信仰による立正佼成会の展開を記した森岡（1981）と，教主自らが複数回ハワイに渡って布教した天照皇大神宮教の活動の経緯を記した西山・藤井（1981）などがある。また，この調査に参加した研究者がその後に，海外での日系宗教の展開について包括的にまとめた井上（1985），中牧（1986，1989）がある。

柳川らの後の研究としては，ハワイの神社史の唯一の体系的な研究である前田（1999），ハワイ浄土真宗の布教活動の変遷をその機関誌などから分析した島田（2001），ハワイ浄土真宗の先駆的リーダーに焦点をあて，日本仏教がアメリカ文化風土に即して変容していく過程を明らかにした守

屋（2001），日系仏教各宗派とその布教活動の特徴と移民の出身地や生活様式との関係を検討した守屋（2008）などがある。また，最近の優れた研究として日系宗教実践の現場に一歩踏み込んで，祖国日本との関係を越境的な視点から論じた高橋（2014）がある。しかしながらその研究は，日系宗教として代表的な教団である，日系仏教の浄土真宗，新宗教の天理教，などの教団としての宗教者の活動内容の研究に止まっており，それらの活動の対象であり一方の主体でもあった信仰者の実践の研究については十分とはいえないと考える。

2. ハワイの日系宗教史の概要

まず代表的な日系宗教である日系仏教のハワイにおける布教開始についてみよう。1889（明治22）年に大分県の浄土真宗本願寺派僧侶であった曜日蒼龍（かがひ・そうりゅう，1855-1917）がハワイに渡り，オアフ島を拠点にハワイ島，マウイ島，カウアイ島の主要四島を巡教しており（曜日 1889），それが日系仏教の宗教活動の嚆矢となった。しかし曜日蒼龍と京都にある本山との間に齟齬が生じ，本山が認可した正式な活動とはならなかった。浄土真宗本願寺派（ハワイでは本派本願寺と名称）は，後の 1897（明治 30）年に宮本恵順を派遣し，曜日の帰国後に本山の認可なしに運営されていたオアフ島ホノルルの布教所を接収して浄土真宗本願寺派出張所とし，正式な活動を始めた（後に場所を変えて本派本願寺ホノルル別院となる）。同年，宮本恵順はハワイ島ヒロにも行き，第一回官約移民の移民監督で商業人として成功していた木村斉次（斉治，長崎県，



	設立年	仏教宗派	N	寺院名
1	1896	浄土宗	1	ハマクア仏教教会
2	1897	浄土真宗	1	ヒロ本願寺別院
3	1897	浄土真宗	2	コナ本願寺
4	1898	浄土真宗	3	ホノム本願寺
5	1899	浄土宗	2	ラウパホエホエ教会
6	1900	浄土真宗	4	ナアレフ本願寺
7	1902	浄土真宗	5	オーラア（プナ）本願寺
8	1902	浄土真宗	6	パハラ本願寺
9	1902	日蓮宗	1	パハラ日蓮宗教会堂
10	1902	浄土宗	3	カパアウ（コハラ）教会
11	1902	浄土真宗	7	パパアロア本願寺
12	1902	浄土宗	4	カーチスタウン教会
13	1904	浄土真宗	8	ホノカア本願寺
14	1905	浄土宗	5	ワイナク教会
15	1905	浄土宗	6	ハカラウ教会
16	1907	浄土真宗	9	コハラ本願寺
17	1909	浄土真宗	10	パパイコウ本願寺
18	1909	浄土宗	7	ハヴィ教会
19	1910	浄土宗	8	ヒロ明照院
20	1914	浄土真宗	11	ホノヒナ本願寺
21	1914	曹洞宗	1	コナ大福寺
22	1920	曹洞宗	2	ヒロ大正寺

注1：地図上の●は浄土宗，○は浄土真宗，■は日蓮宗，□は曹洞宗を表す
注2：表のNは宗派ごとの施設の設立順を表す

図1　ハワイ島の日系仏教寺院（真言宗を除く）
資料：Lucas, Paul F. Nahoa（1995）に所載の地図に筆者加筆

1849-1913）の協力で開設されていた布教所を公認した（後の本派本願寺ヒロ別院となる）（常光 1971）。

その間に，浄土宗は 1894（明治 27）年にハワイで布教を開始し，1896（明治 29）年にハワイ島ハマクアのパアウハウに布教所（後のハマクア仏教教会）を建立した（常光 1971）。この浄土系二宗派はハワイ島では日本人移民の多いヒロ地域からハマクア地域にかけてその集住地に陣地を奪うように寺院を建立していった（図 1）。

他宗派についてみると，日蓮宗は 1899（明治 32）年に僧侶・高木行運（岐阜県，不明 -1946）がハワイに渡り[1]，1902（明治 35）年にハワイ島の南部にあるカウ地域パハラのカパパラに寺院を建立した。高木行運は 1912（明治 45）年にホノルルに出て，後のハワイ日蓮宗別院となる仮布教所を設立した（常光 1971）。曹洞宗は 1903（明治 36）年から翌年にかけて備後地方の僧侶が数名，同地出身の移民を慰撫するためハワイに渡り，オアフ島ワイパフ，マウイ島パイア，カウアイ島ワヒアワなどにそれぞれ寺院が建てられた。曹洞宗のハワイ島への進出は遅く，1914（大正 3）年にコナに，2 年後の 1916（大正 5）年にヒロに寺院が建てられた（曹洞宗ハワイ開教総務部編 1978）。

真言宗は浄土系二宗派に比べ 20 年ほど後の 1914（大正 3）年に正式な開教となっており，その活動は他の仏教宗派とは大きく異なっている。ハワイの真言宗の信徒は日本での弘法大師を信仰する「大師信仰」がその基盤となっており，僧籍を持ちながら 1902（明治 35）年に出稼ぎ移民として山口県からハワイに渡った湯尻法眼（本名・懐一，1881- 不明，1902 年に妻・クカとともに渡航）により 1902（明治 35）年マウイ島ラハイナに仮布教所（後の法光寺），1908（明治 43）年ハワイ島ヒロに法眼寺が建てられた。1914（大正 3）年に高野・醍醐両本山から選ばれた関栄覚（1877-1957）が真言宗初代開教監督としてハワイに来て，湯尻と共にハワイ諸島を巡り，それまでに建てられていた各地の大師堂の主任を選別しながら，僧籍に編入していったという歴史を持っている（鳥取編 1927：110-114）。

神社神道についてみると，まず 1898（明治 31）年にハワイ島ヒロに熊本県からの移民である合志覚太（不明 -1902，1892 年官約移民として渡航）によって大和神社が建てられ，それが後のヒロ大神宮となった。同じ頃にカウアイ島ラワイにも大神宮が建てられた。ついでオアフ島ホノルルに，1903（明治 36）年に高知県出身の千屋松恵（1861-1929）によりハワイ大神宮，1906（明治 39）年に広島県出身の宮王勝良（1874-1935）により出雲大社（出雲大社教）が創祀された。そのほか，稲荷神社（1910 年），加藤神社（1911 年），石鎚神社（1913 年），金比羅神社（1919 年）などがつくられていった。ハワイ島では，ヒロには大和神社（ヒロ大神宮）の他に，ヒロ出雲大社，椰子島石鎚神社，二つの稲荷神社[2] が建てられた。大神宮はヒロ以外のオーラア十四哩（マイル）[3]，ハマクア地方のハカラウ，ワイナク，そしてコナのケオプーにも小さな社殿の「大神宮」が建てられた。石鎚神社はヒロの北にあるオノメア，ホノムにも建てられた。また祇園神社がオーカラ，パアウハウ，マウカなどのプランテーションに建てられた（前田 1999：4-14，260-265）。

しかし，ヒロの神社以外では，オーラア十四哩大神宮と後述するコナの出雲大社を除いて，ほとんどが神職は無住であったと思われる。

日系仏教，神社神道以外にも大師信仰，観音信仰，地蔵信仰などの日本の民間信仰が，移民たちによってハワイに持ち込まれた。大師信仰は，前述のように弘法大師の持つ功徳を期待して信仰するもので，サトウキビ耕地の居住地であるキャンプ内で移民たちによって集まりが持たれた。観音信仰は主に女性に信仰されたが，曹洞宗の布教にも取り入れられた（浅井 2010）。地蔵信仰は水難や幼子の供養として，寺院以外の場所にも地蔵像が日本人移民たちによって建てられた（中牧 1986）。

新宗教についてみると，戦前に進出した主なものとして，1926（大正 15）年の金光教[4]，1927（昭和 2）年の天理教，1935（昭和 10）年の生長の家がある。戦後には 1952（昭和 27）年の立正佼成会，1953（昭和 28）年の天照皇大神宮教など多くの新宗教が進出し（柳川・森岡 1979），ハワイはさながら日系宗教の見本市の様相を呈するようになっていった（高橋 2014）。

これらの日系宗教の日本人移民社会とその生活に対する役割を考えてみたい。日系仏教は，移民やその家族の死に際しての葬祭に関わり，読経，戒名の授与などを行った。そして移民当初の先亡同胞，主に定住しはじめてからの家族，そして定着してからは日本の先祖をも供養した。このような葬祭と供養という日本と同様の役割に加えて，ハワイではキリスト教の影響を受けて毎週日曜日に礼拝をおこなうようになったが，これは参加者同士の懇親に役立った。同じくキリスト教の影響を受けて日曜学校も開かれるようになった。信者や地域住民が建立した寺院は，コミュニティセンターとして種々の集まりの場所としても使用され，出身地ごとの集まりや，婦人会などの集まりが催された。またカルチャーセンターとしても機能し，日本文化を学ぶ場所として柔道・剣道などの武道，女性のための教育として行儀作法，裁縫などが教えられた。

日系仏教寺院は子弟教育の場としても非常に重要であった。仏教寺院の多くには日本人学校（後の日本語学校）が併設された。ハワイ島のように広大な面積のところでは分教場にも設置され，日系仏教の開教師（僧侶）たちの多くがその教師としての役割を担った。地域の中心にある寺院は，周辺地域に住む日本人移民子弟のハイスクール通学のための寄宿舎としても利用された。二世の親睦団体としてキリスト教の組織を参考にした仏教青年団（YBA）がつくられた。また，1920 年代半ばに公立学校でつくられたボーイスカウトが，1930 年代になると日系宗教教団ごとにも結成され（曹洞宗ハワイ開教総務部編 1978），子弟たちには日系社会に属しながらもホスト社会への適応が図られた。

神社神道についてみると，日本人という民族意識を表す神社として大神宮や出雲大社などが祀られ，日本の出身地の氏神を祀るという郷土意識の表れとして，加藤神社（熊本県），白崎八幡宮（山口県岩国市），長尾八幡宮（山口県周防大島）などが祀られた。職業に関する神社として稲荷神社，金比羅神社，恵美須神社などが建てられた（前田 1999：12-13）。また，創建に霊能者的存在が関与した例としてパラマ稲荷神社や石鎚神社があり，淫祠邪教との批判を受けたりした。1910

年代，日本の大正時代に入ってからは結婚式を行うようになり，ホノルルの出雲大社では当時盛んであった「写真結婚」のハワイでの挙式を行う場所として人気となった（前田 1999：16-17）。

民間信仰のなかではプランテーション内のキャンプ住民による大師講が注目される。当初は移民たちによる集りのなかでの現世利益を願う信仰であったが，そこに俗民リーダーが現れ，祈祷，占い，信仰治療，憑き物落としなどを行うようになった。医者による治療の機会が困難な移民にとってはその代替者となり，生活の不安を抱く者を慰撫する役目を持った（星野 1981）。

このようにハワイの日本人移民の日系宗教信仰の主たるものだった日系仏教以外にも，神社神道は移民の出身地を顕示する信仰として日本人のまとまりの要となったし，民間信仰は移民の郷土での生活に密着した信仰として異国の地にあっても移民の日々の信仰としてあり，また日系仏教とも関連しあった。新宗教は，第二次世界大戦を挟む時代の転換の中で，明確な信仰と，現世利益，葬祭を含む総合的な役割を持ち，既成宗教や民間信仰に代わる新しい信仰として，他宗教からの改宗を伴いながらハワイの中で広められていった。

日系宗教はこのようにそれぞれの役割を担っていたと考えられるが，実際の移民の生活の中で，日系宗教はどのように機能し，関係しあってその役割を果たしたのであろうか。その問いに答えるため，ハワイ島コナ地域を対象として日本人移民の日系宗教の信仰実践について詳しくみてみたい。

3. コナの日系宗教

3-1. ハワイ島コナ地域

コナはハワイの中でもいち早く西洋社会と接し，西洋化の起点となったところである。1779 年にジェームズ・クックがケアラケクア湾に来航し，そこで落命したことはよく知られている。1820 年にはアメリカの宣教師がコナで布教を始めた。1850 年代にコーヒーの商業栽培が始まり，次第に盛んとなり，ハワイ島北部のコハラ地域から中国人移民が流入しコーヒー栽培に従事した。日本人移民もサトウキビ・プランテーションから流入し，当初は中国人のもとでコーヒー栽培に従事した。

1899 年の不況により，中国人の栽培者は農地を離れ，白人資本家は農民に小分けした農地を貸出しし，日本人移民はコーヒー農家として独立していった。その後も，半奴隷的なプランテーション労働を忌避し，コーヒー農家という独立事業と自由を求める日本人移民の流入が増加して，コーヒー農家の大半を日本人が独占するまでになった。1930 年代，日本人移民・日系人が地域人口の過半数を占めるようになり，コナは日本人村の様相を見せる独特の地域となっていた（平川 2020）。

3-2. コナ地域における日系仏教の開教と展開

コナでの日系仏教宗派の活動は 1897（明治 30）年の浄土真宗本願寺派（本派本願寺）から始ま

る（図 2）。前述のように 1897 年はホノルルやヒロに別院が建立された年であるが，この時期はまたコーヒー栽培の隆盛によって日本人が急激に増加していく時期でもあった。山口県出身の佐藤行信が単身ハワイに渡り，個人の資格でハワイ島コナに入り活動を開始した。1899（明治 32）年，佐藤行信はコナの中央部にあるカウイナリウ地区に浄土真宗の布教所を置き，1900（明治 33）年に日本人小学校も開設した[5]。1901（明治 34）年にコナで商店を経営していた法月健助[6] の発起で墓地用地として官立学校の上手に土地が購入され，次いで 1903（明治 36）年に寺院用地も購入された。そして 1906（明治 39）年にケアラケクア（コナワエナ）地区に寺院を建立し，本山からの公認を得て浄土真宗コナ本願寺となった（本派本願寺布哇開教教務所文書部編 1918：458）。初代の佐藤行信（山口県，在任 1897-1907）のあと，第 2 代は阿部定映（大分県，在任 1907-1909）がつとめた。この二人は先述した曜日蒼龍（大分県・東陽塾門下）と同門・門弟の関係で，浄土真宗本願寺派の初期の活動には日本の九州地方の真宗ネットワークの存在の影響が大きかった（高山 2011）。第 3 代からは本山およびホノルル別院からの派遣で，山口県出身の無漏田秀孝（在任 1909-1915），続いて第 4 代はその兄弟である無漏田謙恭（在任 1915-1922）がつとめた。以後，第 5 代石浦宗賢（熊本県，在任 1922-1925），第 6 代飯田義見（島根県，在任 1925-1936）と続き，第 7 代松浦秀雲（広島県，1936- 開戦）が戦前最後の担当となり，日本とアメリカとの戦争開始後抑留されアメリカ本土に送られた。

浄土真宗に遅れること 17 年，1914（大正 3）年に曹洞宗の布教が始まった。東京の多摩出身で曹洞宗大学を卒業した児玉介石は海外布教の志篤く，1910（明治 43）年にハワイに渡った。曹洞宗ハワイ布教の嚆矢の一つであるマウイ島パイア満徳寺の植岡祖暁（広島県・現三原市）のもとで

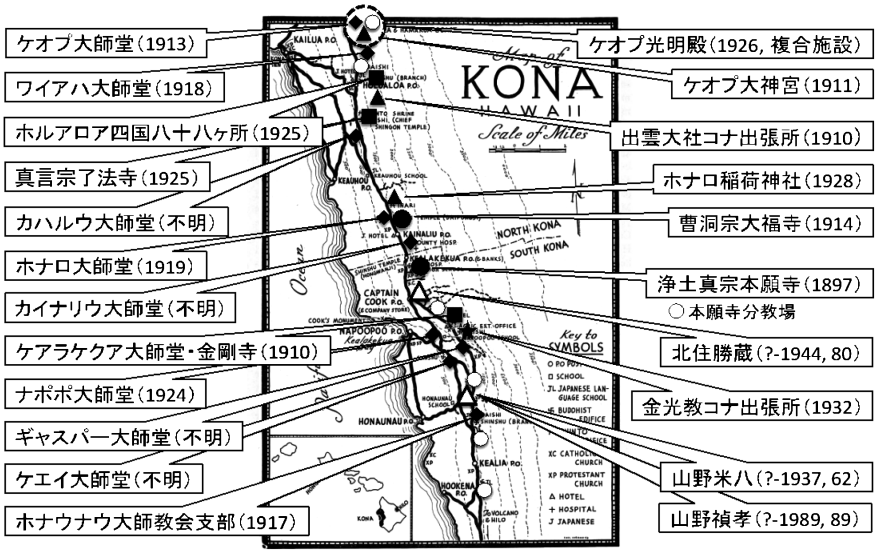


図 2　ハワイ島コナ地域の日系宗教施設
資料：Embree（1941）に所載の地図に筆者加筆

開教師としての経験を積み，1914 年に植岡と共にハワイ島を巡教した。その結果，ハワイ島最初の布教所をコナの中央近くのホナロという集落にある備後地方（広島県御調郡八幡村，現三原市）出身者の商店内に置くこととなった。これが発展して 1916 年に同じホナロ地区に寺院を建立し曹洞宗コナ大福寺となった。初代の児玉介石（在任 1914-1918）のあと第 2 代として静岡県出身の垣浦明道（在任 1918-1921）が来任した。このとき寺院敷地の借地権の問題から移転をしての新寺院の建立がおこなわれ，その本堂の背後に共同墓地が付設された。第 3 代には備後地方出身の神原義孝（広島県・現三原市，在任 1923-1926）が来任した。神原義孝は日本語学校校長も兼任し夜学校も開設した。神原夫人は処女会，行儀作法，裁縫，刺繍などの女子教育に力を入れた。第 4 代細川靠山（東京府，在任 1926-1928）の後，新潟県出身の第 5 代中山宝瑞が日米開戦まで在駐し（在任 1928-開戦），やはり彼も宗教者としてアメリカ本土に抑留された（曹洞宗ハワイ開教総務部編 1978）。

詳しくは後述するが，コナはハワイのなかでも特に民間信仰の大師信仰が盛んであったところで，僧侶の駐在がなかったにも関わらず大師堂が多く作られていった（鳥取編 1927，124）。その契機となったケアラケクア大師堂は，1910（明治 43）年に建てられ，僧侶不在のまま「金剛寺」と呼ばれて寺院格として扱われた。コナに真言宗の僧侶が常駐するのは 1924（大正 13）年の寺前弘道からである。寺前弘道は，広島県山県郡壬生町（現・大竹市）から移民として 1906 年に妻ハルとともにハワイに渡り熱心な大師信仰者から宗教者となった者で，彼がコナのカウマルマルに創建した真言宗弘法寺（1929 年に了法寺に改称）では祈祷寺院としての活動を行っていた（在任 1924-35）。寺内弘道がホノルルに移動した後，日本から野々村宥孝が来任し，日本語学校校長や柔道師範を兼任しながら日米開戦のために本土抑留されるまで駐在した（在任 1937-開戦）。「大師信仰」からの宗教施設建立の例がもう一つある。広島県安芸郡船越村（現・広島市）からの移民である武田光次郎[7]（僧名・光道，渡航年不明，1862?-1935）の私財により 1925（大正 14）年に設立された四国八十八ヶ所のミニチュア版としての写し巡礼地の「新四国八十八ヶ所」である（鳥取編 1927，近藤 2005）。武田光次郎は 1935（昭和 10）年に 73 歳で死去しているが，その後も信徒によって変わらず大師信仰の施設として運営された。このように真言宗とその寺院はコナにおいてもその基盤を大師信仰においており，葬祭への関与よりも，祈祷寺院としての役割が強かった。

コナにおいてはここまででみてきたように，浄土真宗と曹洞宗の日系仏教二宗派が主に日本人移民の死に際して葬祭を受け持っていた。Embree（1941）によれば，日系仏教寺院の僧侶は英語がしゃべれなくても，それが葬式において彼の聖職者としての職務を果たす妨げにはならなかった。本願寺の場合，1937（昭和 12）年当時はおよそ 200 世帯のメンバーと呼ばれる信者[8]を持っていたが，彼らは寺院の行事には決して参加しないため，僧侶はその信者たちの姿をほとんど見たことがなかったという。当時にあって僧侶はまだ一度も顔を見たことのない人びとの家庭で葬式をとりおこなうことは珍しいことではなかった（Embree 1941：105）。

寺院運営の必要な経費としては，寺院を訪れる人びとの寄付の他，重要な財源として，居住地域の相互扶助組織である「組」から新年に渡される年ごとの献金があった。1937（昭和 12）年には，およそ 450 ドルを「組」からの献金として受け取っており，その一部は日本の本山に送られた。この金額には葬式からの収入は含まれておらず，葬式からの収入はそれをおこなった僧侶のものとなった。当時の本願寺の僧侶は，コナの年老いたコーヒー農家の高い死亡率に支えられ（葬儀のお布施によって）十分な収入を得ていたという（Embree 1941：106）。

コナの日本人移民を埋葬する施設として，戦前に開設された日本人墓地が 7 カ所ある。最初に設立されたのは北コナのホルアロアにある日本人墓地であるが，これは 1896（明治 29）年に設立された。コナでの初めての日系仏教である浄土真宗の活動が始まる 1897（明治 30）年の前年であった。当時の日本海軍の幹部で，のちに内閣総理大臣となった齋藤實の実弟である齋藤省吾が 1896（明治 29）年にコナで亡くなったことが契機となり，有志からの寄付を募ってつくられた。続いて，先述したようにコナ本願寺建立に先立って，隣接する敷地に 1901（明治 34）年に共同墓地が開設された。次に 1910 年代前半に南コナのケエイ地区に複数の「組」によってケエイ墓地が開設された。1920（大正 9）年に移転新築された大福寺の境内裏手にも共同墓地が付設された。そのほか，北コナにケオプー墓地，ワイアハ墓地，南コナにカラヒキ墓地がある（平川 2020）。

自宅で葬儀を終えた遺体は，僧侶が主導する葬列によって墓地へと運ばれた。1920 年代頃からは多くの自動車からなる葬列が組まれるようになった。墓地でも死者を弔う儀式が行われ，その後「組」のメンバーによって準備された墓穴に埋葬され，墓標がつくられた。埋葬の直後は，墓標の基壇となるコンクリートの上には木製の卒塔婆が建てられ，数年後の供養の際などに石製の墓標が造立されたようである。

日系仏教によって葬祭がおこなわれた者の墓標の正面には，ほとんどの場合戒名が刻まれている。墓石の左右には被葬者の没年月日，実名，享年，日本の出身地が刻まれている。戦前は個人墓が主流であったが戦後には複数の納骨が可能なカロート（収納室）を持つ家族墓が主流となっている。

コナは日本人移民が地域人口の過半数を占めたため，日系仏教宗派とホスト社会との軋轢は見られず，それらは多くの日本人家庭の宗教となった。宗派教団内でも二世のための活動組織が作られた。前述した YBA（仏教青年会）のために，それぞれの宗派のメンバーたちはその寺院の境内にそのための会館を建設したし，さらに本願寺のメンバーたちは遠隔地の布教場の近くにも青年会館を建てたりした。学校や宗教団体ごとに結成されたボーイスカウトは少年義勇団とも呼ばれ，軍隊式の青少年教育をするものであった。ボーイスカウトは日系宗教の団体でも結成されたが，これは二世に日本人というアイデンティティを保持しながらもホスト社会に適応させ，日本・アメリカ双方への忠誠心を持たせ，最終的には米国軍人とするための装置としての役割を果たしたと考えられる[9]。

3-3. コナの神社神道と神職

筆者の現地調査ではコナで3社確認されている[10]。まず1910（明治43）年に北コナのホルアロアの字であるカウマルマルに，ホノルル出雲大社のコナ出張所として出雲大社が松村正穂によって建立された（前田 1999：155）。松村正穂（1882-1963）は広島県比婆郡山内西村（現・庄原市）の八幡神社の神官の家に生まれ，1906（明治39）年にハワイに渡り，ホノルル出雲大社に奉職しながらホノルル・アアラ街で書店も営んでいた。松村は1915（大正4）年までコナで神職をつとめ，その年マウイ島に転じて馬哇（マウイ）神社を建立した（松村 2007）。後任には生熊内記（広島県神石郡永渡村出身）が来任し，1920年頃まで神職をつとめた。生熊内記の在任中には，コナの出雲大社でも結婚式がおこなわれていたことが日本語新聞の広告でうかがえる（「コナ反響」1917年4月19日）。生熊がホノルルに戻った後は無住の状態であったようだが，1929年発行の日布時事年鑑の人名住所録には出雲大社の神官として佐藤常臣[11]（福島県）の名前がみえる。それ以外に神職が駐在した形跡は見当たらず，その後は日米開戦により出雲大社が廃されるまで無住であったと思われる。

北コナのラニハウ集落にある「キオプ大神宮」[12]は，1911（明治44）年に建立された（中島 1934）。その後に，その場所に設置され1926（昭和元）年に改築された，近隣集落の公会堂である光明殿（こうめいでん）内の三つに別れた祭壇の中央に祀られており，その背後に小さな本殿が設けられている。光明殿の祭壇にはそのほかに，向かって左側に大師信仰の弘法大師像と掛軸，右側に浄土真宗の阿弥陀像が置かれ，大師堂として，また本願寺の分教場としても利用されたが，後には曹洞宗も当地の布教の際に利用した。また，近隣集落の子弟の日本語学校としても使われた。

1928年（昭和3）年には中コナのホナロ地区の曹洞宗大福寺のすぐそばに稲荷神社が建立された。この稲荷神社はヒロ在住の伊賀松次郎が伏見稲荷を勧進して建立したヒロの稲荷神社（1913年開創）のコナ分社で，同じく伊賀松次郎によって建立された。伊賀松次郎は，山口県吉敷郡名田島村から1899（明治32）年に独立渡航者[13]としてハワイに来て，1902（明治35）年にヒロの又野旅館を引き継ぎ，1916（大正5）年に稲荷神社をヒロに建立した。Embree（1941）によれば伊賀松次郎とその夫人（タメ，1917年呼寄せ）によって稲荷像を用いた占いや祈祷を行っていたという。

以上コナの3社のうち神職が駐在していたのは2社であったが，神社に駐在しない在野の神職もいた。熊本からの移民である北住勝蔵（熊本県，1944年没，享年80歳）は，1895（明治28）年にハワイに渡り，移民労働を12年した後，ヒロ大神宮神主代理を5年つとめ，その後にコナに来て白人世帯の家庭労働に従事した（品川・中原 1927）。Embree（1941：117）で述べられている「白人家庭の庭師として働く年老いた神職」とは，彼のことと思われる。同じく熊本からの移民である山野米八（1937年没，享年62歳）は，1906（明治39）年にハワイに渡り，ホノルルのハワイ大神宮に奉職，のちにコナ来てコーヒー栽培をしながら在野の神官や日本語学校の教師などもつとめていた。当時の日本語新聞「日布時事」（1909年11月25日）によれば，山野米八は1909

（明治 42）年，ホノルル・アアラ街にあった松村正穂の店舗（書店）を引き継ぎ，その店舗を薬店として経営したが失敗したようである。その後のコナへの移住も松村とのつながりからであったかもしれない。米八は長男の山野禎孝（日本生まれで父の呼寄せにより渡航，1900?-1989）をコナにおき，1930 年代はじめに残りの家族を引き連れてハワイ島南部のカウ地域のパハラに移住している。パハラには 1930 年代にコナから移住した人たちの集住地があり，米八の一家もそこに居住して神道による祭祀を行なっていたという。長男の山野禎孝もコーヒー農家をしながら在野の神職としての活動をしていたと思われ，彼の死後に神職の衣装や神棚，霊符などの遺品が遺族によってヒロ大神宮に持ち込まれている。Embree（1941：126）で述べられている「年老いた神官を助ける日本生まれの若者」とは彼のことだと思われる。戦前戦後を通じてコナ地域の日本人会などの要職にもついていた彼は，日本の祖神道[14]（教祖・松下松蔵，本部・熊本県）への信仰も持っており，その本部へも何度かコナの日系人を伴って訪ねている[15]。

コナの 3 社のうち出雲大社は，一説では日米開戦となって FBI からの嫌疑を恐れた信者によって取り壊されたという（前田 1999：9）[16]。ケオプ大神宮は戦後も光明殿のなかに置かれたが，最近になって光明殿が地域の施設としての役目を終えるとともに運営していた「組」は建物の権利を手離した。稲荷神社の廃絶は定かではないが，前田（1999：9）によれば伊賀が奉祀したヒロの稲荷神社は 1962（昭和 42）年にヒロ大神宮に合祀されたとされていて，その元をコナの稲荷神社としているので，おそらくはそのときに廃されたのであろう。

このようにコナ地区では 1930 年代から神社神道は十分な活動はおこなわれておらず，在野の神職の活動も戦後は一人だけとなってしまったようである。それに取って代わったのか，戦前では 1930 年代から仏教寺院での結婚式が行われ（Embree 1941），戦後は浄土真宗僧侶による地鎮祭（起工式）がおこなわれていたようである[17]。

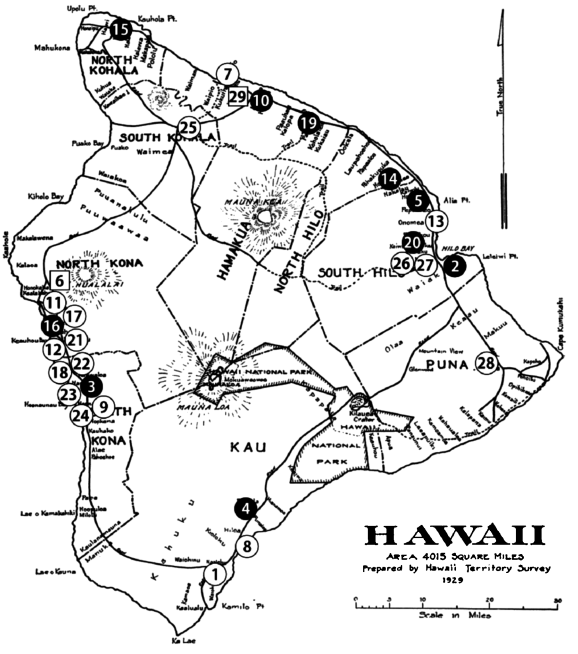
3-4. コナの民間信仰としての大師信仰

ハワイの日本人移民による民間信仰の最たるものである大師信仰については，その詳細な研究として先述した星野（1981）がある。星野によれば，大師信仰の発生は不明であるが，1885（明治 18）年に開始された官約移民当初から 1900 年頃にかけて始まったという。これは日本の風習が持ち込まれたもので，特に山口県の周防大島からの移民が中心となったサトウキビ耕地の日本人居住地での集会のひとつとしての大師講があったという[18]。大師講の集会は月に一度，20 日か 21 日の晩に，当番の家でハワイに帯同した弘法大師像または掛け軸を飾り，参加者一同で勤行し，そのあとは食事やおしゃべりを楽しんだ。大師講ではそのリーダーに対する加持祈祷の期待が生まれ，健康祈願，病気平癒，悩みの解決，憑き物落としなどの祈祷を売り物にする者もあらわれた。そして，それらの俗人リーダーへの批判が契機となって，真言宗の正式開教になったと述べている。

ハワイの大師信仰の特徴は，本尊が弘法大師像で[19]，弘法大師の功徳に願いを懸けるものであり，仏教的な民間信仰の特徴を持っていた。また大師講では頼母子[20]が行われていた。星野の述べるよ

うに筆者の調査でも後述するように，ハワイ島をはじめとしてハワイの他の島々でも病気治しや加持祈祷などが行われていた。それらには正邪の位相があって，祈祷・呪法による犬神などの憑き物落としのように「拝み屋」による淫祠邪教との批判を受けるような明らかな行為とは別に，医者にかかることが容易でなかった当時の環境のなかで，神仏に願う行為，その願いに応える行為としてそれらがあったことは認めなければならないであろう。

コナでは大師信仰が特に盛んであった（図 3）。真言宗初期の開教の様子を記した鳥取編（1927）によれば，1910（明治 43）年にコナのケアラケクア[21]（後にキャプテン・クックと名称される地区）にケアラケクア大師堂がその地域の信仰者たちによって建立され，僧侶不在のままであるにも関わらず年々と隆盛となっていき，金剛寺という寺院となった。これが契機となってコナ地域では次々と大師堂が建立されていき，1913（大正 2）年に北コナに「キヨプー公開堂」[22]（ケオプー光明殿）が，1917（大正 6）年に南コナのホナウナウに大師堂が建てられ，それが昇格してホナウナウ大師教会支部[23]となった。1918（大正 7）年には北コナのワイアハ[24]に公開堂（公会堂）として建てられ，宗派の如何を問わず共同して経営にあたった[25]。1919（大正 8）年には中コナのホナロ地区に大師堂が建てられたが，それは曹洞宗大福寺の境内の中であり，本堂と外廊下で繋がっていた。曹洞宗大福寺が新築移転された際に行われた入仏式の後に突如大師堂への入口は閉ざされ，それ以降は大師堂を使用することができなくなった[26]。ホナロ大師講の信徒たちは，仕方なく講の



	設立年	施設	N	所在地	施設名称
1	1907	大師堂	1	カウ	ナアレフ大師堂
2	1908	寺院	1	ヒロ	法眼寺
3	1910	寺院	2	コナ	金剛寺
4	1911	寺院	3	パハラ	持照寺
5	1912	寺院	4	ホノム	遍照寺
6	1913	複合	1	コナ	ケオプー光明殿
7	1917	大師堂	2	ハマクア	ククイハエレ大師堂
8	1917	大師堂	3	カウ	ホヌアポ大師堂
9	1917	大師堂	4	コナ	ホナウナウ教会支部
10	1918	寺院	5	ホノカア	金福寺
11	1918	大師堂	5	コナ	ワイアハ大師堂
12	1919	大師堂	6	コナ	ホナロ大師堂
13	1919	大師堂	7	ヒロ	カラオア大日堂
14	1921	寺院	6	ハマクア	ワイカンマル分（持照）院
15	1924	寺院	7	コハラ	弘法寺
16	1925	寺院	8	コナ	弘法寺（了法寺）
17	1925	大師堂	8	コナ	新四国八十八カ所
18	1925	大師堂	9	コナ	ナポオポオ大師堂
19	1926	寺院	9	パアウイロ	金剛寺
20	1937	寺院	10	カイピキ	法明寺
21	不明	大師堂	10	コナ	カハルウ大師堂
22	不明	大師堂	11	コナ	カイナリウ大師堂
23	不明	大師堂	12	コナ	ジャスパー大師堂
24	不明	大師堂	13	コナ	ケエイ大師堂
25	不明	大師堂	14	コハラ	ワイメア大師堂
26	不明	大師堂	15	ヒロ	アマウル大師堂
27	不明	大師堂	16	ヒロ	ピイホヌア会館
28	不明	大師堂	17	カウ	パホア大師堂
29	不明	複合	2	ハマクア	カプレナ会堂

注1：地図上の●は真言宗寺院，○は大師堂，□は他宗派との複合施設を表す
注2：表のNはそれぞれの施設の設立順を表す

図 3　ハワイ島の真言宗寺院と太師堂
資料：Lucas, Paul F. Nahoa（1995）に所載の地図に筆者加筆

総代である鎌倉良太郎（広島県，運送業・珈琲栽培業，渡航年・生没年不明）の自宅を仮道場として講社を継続した。1925（大正 14）年には北コナのホルアロアに前述した新四国八十八ヶ所が創設された。同年，南コナにあった「ナポポー[27] 仮大師堂」が改装され正式なものとなった。このときの儀式を執り行い，また婦人会などの設立の後援をしたのは，曹洞宗コナ大福寺三代目開教師の神原義孝であった[28]。また，鳥取編（1927）には記載されていないものでは，北コナの南端であるカハルウ，中コナのカイナリウ，南コナのナポオポオ地区の官道沿いのギャスパー[29]，ケエイ墓地の隣接地にも大師堂がつくられた。こういった公式の記録に残らないものはそれぞれの地区の「組」などの寄り合いの場所として設けられたものであろう[30]。

コナでの大師講は，20 日か 21 日の夜に大師堂に講中が集まり，大師の掛軸に向かい読経が行われた後，食べ物が出された。1930 年代後半には，大師堂にやってくるのは老人たちが主となっていたが子や孫などの少年少女たちも連れられてきた[31]。Embree（1941）によれば，キャプテン・クックにある大師の寺院（ケアラケクア金剛寺と思われる）では僧侶が不在ではあったものの平信徒（laymen）の千回読経などによる祈祷や病気治しが行われていた。

現在でも，自宅で大師信仰および真言宗の護符・霊符が仏壇のなかに置かれたり，建物の出入口などにも貼られたりしており，葬祭を司る仏教宗派との重層的な関係は自然なものとして行われていたことがうかがえる。

大師信仰者のネットワークによる婚姻や移動と思われる事例もある。ホナウナウ大師教会支部の総代であった市村好介（山口県玖珂郡柳井町，コーヒー栽培業，1896 年渡航，1876-1954）[32] の夫人はハマクア地区を担当していた開教使，谷持圓の妹であった。当時の市村宅の道路向かいにあったホナウナウ日本語学校にハマクア地方のカプレナから後藤徳右衛門（長野県下伊那郡且開村，父の呼寄せで 1918 年渡航，1899-1991）が校長として来たが，その夫人はカプレナの日本語学校の前で商店を営んでいた熱心な大師講信者の濱崎好松（芳松，山口県熊毛郡佐賀村，1902 年渡航，商店経営，1881-1963）の二女であった[33]。

このようなコナでの民間信仰としての大師講の隆盛と大師堂建立が続く中で，ハワイ島の北東部のハマクア地域から，寺前弘道が真言宗僧侶としてコハラ地域とコナ地域に布教に来た。寺前弘道は僧侶としてハワイに渡ったのではなく，1906 年に妻のハルノとともに広島県山県郡壬生村（現・大竹市）から農業移民として来布した。鳥取編（1927）の「コナ地方の本宗の教勢状態」のなかで，大正 12（1923）年にはホノム遍照寺の徒弟であった寺前弘道が高野山大師教会員募集の用務を帯びてカマノマル[34] 地方に出張したのが縁となり，有志信徒のコナ地方大師堂統括の寺院と建立せんとの発願により，数千ドルを投じて立派な殿堂である反響山弘法寺を建立し，翌年 3 月 20 日，21 日[35] に上棟入仏の儀式を行ない，寺前弘道がコハラに駐在し隔月でコナに出張しているとある[36]。

Embree（1941）の Appendix Ⅲ, Faith Healers に寺前弘道と思われる記述がある。そこには，コナには人気のある祈祷師がおり，彼はもともとコハラで活動していたが，その前はサトウキビ畑

で働いていた。コナとハマクアで祈祷師として有名になり，それからコナに住むようになった。カマルマルの大師の寺で活動を始めた彼は，日本に一時帰国した際に手に入れた地蔵像を使って占いを行い，多くの人が治療のため医者よりも彼を選ぶようになった。しかし彼は金銭的に卑しくなりすぎてしまい，いつも現金での報酬を要求するようになった。そして彼は次の野心のためにコナを去り，ホノルルに行って立派な寺を構えたとある（Embree 1941：154）。

寺前弘道に関してもう一つ，彼の移民から宗教者への道のりを語る資料がある。上田（1991）の「三年したら帰るつもり－寺内はな氏の生活史」という仮名を使用したオーラル・ヒストリーの記述がそれである。それによれば，話者の寺内はなは 28 歳の夫とともに 18 歳の時（上田は明治 38 年，1905 年と比定）[37] にハワイに来て，ハワイ島パパイコウのサトウキビ耕地で働いた。夫は病気がちで，またハワイで生まれた二人の子どもを幼くして亡くした。そのような状況のなか，夫は大師信仰を行うようになり，50 歳を過ぎた頃にホノム遍照寺の僧侶（高木秀道と思われる）により得度された[38]。そしてコナに行き，その後ホノルルに向かった。

わずかな名前の違いだけで，経歴はほぼエンブリーの記述と重なる。ホノムの遍照寺は祈祷寺として当時有名で，寺前弘道よりも先に移民から宗教者となった木谷法観（本名・宇助または卯助，1968?- 不明，1898 年渡航）は遍照寺の前身となったホノム大師堂を建立し，祈祷師として有名になった[39]。おそらくは寺前弘道もこの遍照寺で祈祷法を学び，木谷法観からの影響も受けたはずである。

このような大師信仰に根をもつ祈祷師には正邪あり，それを当時のハワイ総領事などは問題にした。特に同じ日系仏教の浄土真宗から「呪法は宗教とは異なる」として，呪法的行為・加持祈祷をさかんに行う真言宗は淫祠邪教であると厳しく非難され，また「病気の時の呪符・狐憑きなどの呪いは迷信で，弘法大師の加持祈祷による病気平癒，稲荷・金毘羅・石鎚などの民間信仰も淫祠邪教」との批判（本願寺布哇日曜学校連合本部，1933，37-47）を受けた。しかしコナでの実相をみると，先述した高野山大師教会直属であるホナウナウ大師教会支部のメンバー約 20 人全てが浄土真宗に所属しており（中川 1954：130）[40]，筆者の墓地調査による戒名（法名）分析でもこのことは確認できている。つまり，教団の思惑とは別に，信仰実践の場では日系仏教，特に民間信仰に対して批判的であった浄土真宗の信仰と並存していたのであった。

日系仏教宗派と深く関わった民間信仰の例として，曹洞宗と観音信仰との関係にも注目したい。

曹洞宗大福寺では，1920 年代から三十三観音供養が 3 月に行われている[41]。現在も，大福寺の本堂の左側部分にある観音堂[42] に，信仰者から奉納された寺号の書かれた 33 体の観音像が巡礼順に並べられ，その足元には各巡礼地の「御砂」が置かれて，御詠歌が歌われるなか参加者による小さな「巡礼」が行なわれる。その 33 の観音像には奉納者の名前が書かれてある。個人もあれば，数人の場合もあり，またグループの場合もあるが，そこに書かれた個人名を数えると 64 名が確認できた。その日系宗派所属を調べると，曹洞宗 37 名，浄土真宗 6 名，不明 21 名で，浄土宗信徒の観音信仰信者がいたことがわかった。このことでもわかるように，曹洞宗の観音信仰は所属メン

バーだけに向けられたものではなく，ハワイでの布教活動としては後発であった曹洞宗の，信者獲得のひとつの手段にもなったことがうかがえる[43]。

コナ地域の日系宗教に関する施設の開設された年代について，図 1，図 2，図 3 をみれば，日系仏教宗派は 1890 年代の終わりころから 1910 年ごろにかけて集中して建てられ，民間信仰の施設である大師堂はその後の 1910 年ごろから 1920 年代の終わりごろまでに建てられていることがわかる。これは一体何を意味するのであろうか。最後に考察してみたい。

3-5. コナの信仰治療者

先述の Embree（1941）の Faith Healers の項には民間の信仰治療者の存在も記されている。Embree が豆腐屋の未亡人（別の箇所では Mrs. H. とも記されている）[44] と記した女性は曹洞宗大福寺のメンバーであり御詠歌の指導も行っていたが，毎月彼女の自宅で集まった人びとに大師や観音や稲荷など 5 つの像を使用して祈祷を行っていた。Embree はそれらの像の使い方はカウマルマルの僧侶，つまりは寺前弘道から学んだものであろうとしている。

筆者の調査で Embree が記していない信仰治療者がいたことがわかった。彼女，Mrs. N.（1888?-1982）は熊本県出身で，呼寄せでコナのカハルウ地区のコーヒー農家に嫁いで来た。ホルアロアの新四国八十八ヶ所の武田光道と懇意になり，大師信仰に深く傾倒した。そして彼女も寺前弘道から祈祷法を学んだ。彼女は大師像を拝むことでその力を発揮し，多くの女性の病気や悩みを癒したが，その活動は 1982 年に 93 歳で亡くなるその日まで続けられたという[45]。

このほかにもコナには戦後信仰治療者として活躍した女性の宗教者がいる。真田（1981）にも名がある真言宗醍醐派誓願寺の住職であった十時法照（1930-2017）も人気のある祈祷師であった。彼女は 1959（昭和 34）年に真言宗高野派の開教師としてハワイに来てマウイ島の寺院を経て，ハワイ島パハラの持照寺を長く担当した。十時法照は 1970（昭和 45）年に開教師を辞して帰国したが，すぐに彼女を慕う信者に呼び戻された。そして所属を醍醐派に移してコナで誓願寺を創建し，「法力」のある僧侶として活動した。

このように，コナの稲荷神社の例も含め，戦争前から戦争後にかけて女性の宗教者や信仰治療者の活動が見られたのは，当時の男性中心の移民社会の中での女性の地位や立場が低く扱われ，負担が大きく，宗教的な救済が必要であったことを示唆するものと考えられよう。

3-6. 戦後の新宗教の布教

戦後のコナにおける新宗教の活動については，立正佼成会と天照皇大神宮教に関するものがある。その内容を確認しながら検証したい。

森岡（1981）によれば，立正佼成会はマウイ島生まれの帰米二世の女性により，嫁ぎ先のコナのコーヒー農家の女性を中心に広まった。それは先祖供養による病気平癒を求めるものであったが，彼女自身をはじめ信者たちは墓地確保のため浄土真宗本願寺にも所属していたという。筆者の

調査により信者を比定し，墓地調査の結果から確認したところ，ほとんどの信者とその家族は浄土真宗本願寺に付設された墓地に埋葬されていた。

天照皇大神宮教は 1945（昭和 20）年 7 月，山口県熊毛郡田布施町の農婦であった北村サヨ（山口県玖珂郡日積村生まれ，1900-1967）によって創唱された。「宇宙絶対神の真意にかなった自己鍛錬をし，一切の不条理と決別し，神の国建設を目指す」という宗旨のもと，1952（昭和 27）年 8 月に海外布教の嚆矢としてハワイでの布教活動を開始した。ホノルルでは小松屋旅館[46] で説法を行なった。そのとき，日米開戦によりアメリカ本土に抑留された後にハワイに戻り，ホノルルで祈祷寺院の弘法寺を開創した真言宗僧侶の沖村覚応の妻・ユクが北村サヨのもとを訪れた。沖村覚応は戦前から祈祷で有名であったハワイ島のカラワ大師堂で活動しており，妻・ユクも祈祷師であった。ユクは田布施出身でサヨと同じ婦人会に所属していたのだったが，再会したその時サヨは，手が痛んであげられなくなっていたユクを治してあげたのであった（天照皇大神宮教ハワイ州支部 1975）。

サヨはハワイ島ヒロでも布教を行った。北村サヨの夫・清之進は元ハワイ移民でハワイ島ヒロ近郊のヒイポヌアで働いた経験があり，夫の弟が当時も住んでいてそこを足がかりに説法を行なった。いずれの場所でも病気治しを行なって評判となったが金銭などの要求は行わなかった（天照皇大神宮教 1998，注：正確には 1946 年を元年とする紀元 53 年が発行年となっている）。以後，1967（昭和 42）年に亡くなるまで，サヨは布教のためにハワイを 5 回訪れた。西山･藤井（1981）によれば，大師信仰からの改宗の事例として真言宗ヒロ法眼寺・教団理事長であった岩下林（熊本県，生没年不明）の話が示されている。岩下林はヒロで土木業を営み，真言宗ヒロ法眼寺の第二代教団理事長を 15~6 年勤め，1952（昭和 27）年 5 月に高野山真言宗の和田管長がヒロを訪れたときは自宅に和田管長を泊めたほどの有力信者であった。しかし，1961（昭和 36）年に，妻の「犬神憑き」の因縁を北村サヨから切ってもらったのが縁で入信し，法眼寺の信者 4~5 名を引き連れて伝道に努めた。

ハワイ島ではコナ在住の賀数箸次の要請によりコナでも布教された。賀数箸次（1890-1990）は沖縄県出身で，戦争（徴兵）を忌避して 1906（明治 39）年にハワイに移民し，ハマクア地方でプランテーション労働や密造酒の製造などを経験した後にコナに来て，コーヒー栽培・精製，アボガド栽培などをおこなった。キリスト教牧師で教育者であった比嘉静観と親密で，キリスト教信者として活動し，コナの日本語新聞「コナ反響」やカウアイ島の日本語新聞「洋園時報」に反戦論を積極的に投稿した平和主義者でもあった。その彼が戦後にハワイに進出してきた天照皇大神宮教の教主の北村サヨの説法に触れ，サヨを世界を救う宗教者であると確信したという（西山・藤井 1981）。賀数はヒロで北村サヨの説法を二度聴き，コナでの説法を要請した。その求めに応じてサヨはコナに行き，ホノコハウの公会堂，ケオプー光明殿，ケアラケクアの大師堂（金剛寺と思われる）で説法と病気治しを行った。宿泊先の國井彦次郎が「必勝会」（勝った組）のメンバーだったため，会長の池田一人（帰米二世，元日本語学校長）以下十余名の会員のほぼ全員が信者と

なり，池田はコナの支部長となった（西山・藤井 1981）。

ところがこのような布教活動のなかで，北村サヨは墓標の建立，遺骨の保管は不要と説き，伝統的な日本の祖先祭祀慣行を破棄することを信者に求めた。これはハワイ島のような地方の保守的な日本人にはアレルギー反応を引き起こした（西山・藤井 1981）[47]。

これらの新宗教は，既成の日系宗教を否定し，人びとを救済する宗教としての交代を求めるものであった。一方，死者を送る葬祭は本来民俗行事であったが，仏教の影響を受け仏教民俗として成立し，仏教は葬祭を担う宗教として日本人の生活世界に深く関わった。その代表的な埋葬と墓標の建立の習慣についての問題が新宗教の布教の障害となったのだった。新宗教の葬祭，埋葬，墓標建立については判然としないところが多く，またその研究はほとんど行われていない（石井・藤井 1988）。ハワイのみならず，日本においても新宗教の葬祭の研究が課題として残されているのである。

4. おわりに

日系宗教をみると，日系仏教が日本人移民コミュニティのエスニック・アイデンティティを示す最たる役割を果たしていることがわかる。とりわけ日本人移民とその家族が地域人口の半数以上を占めたコナ地域については，もともとホスト社会とのコンフリクトが少なく，日系仏教が地域に適応し変化しながらも平和的にエスニック・アイデンティティの基盤となっていたものと考える。その実践内容の中心は，仏教による葬祭と供養であった。ハワイでも日系仏教は，葬祭仏教としての役割を担ったが，子弟教育・日曜礼拝・結婚式などでは，キリスト教の教会のスタイルが流用された。

民間信仰，特に大師信仰の役割は，日本の出身地の信仰が移民地において再編され，居住集落ごとの信仰のまとまりとなっていった。現世利益を請うてのさまざまな悩みや問題の解決への願い，祈りの場であり，語り合いの場であった。また大師講は，頼母子講の場ともなり，そこからの資金調達により社会的上昇をうかがう場ともなった。前述したようにコナでは日系仏教に施設がつくられた後に民間信仰の大師堂が建てられている。それはいかに現世利益を求める日本人移民が多かったかということを，そして日系仏教と民間信仰が両輪となって日本人移民にとっての日系宗教の役目を果たしていたことを示すものであろう。現世利益を求めた大師信仰の信者は人生最後の儀式である葬祭は日系仏教に頼った。そしてそれは真言宗とは限らなかったのである。

新宗教はそれまでの日系宗教のように，出身地や居住地によるくくりや，伝統的な慣習からではなく，救済者への信仰の確信を基盤とするものであり，既成の日系宗教に対抗して現世・来世での救済を総合する信仰であった。しかし，新宗教の葬祭や墓地への埋葬の問題は未解決のところがあり，それが布教の問題となったと考える。

以上のコナにおける日系宗教とその信仰実践をみると，いずれの日系宗教を信仰していても，人生最後の儀式においてはほとんどが日系仏教による葬祭を選択していた。このことは，移民の死と

葬送から，日系宗教と日本人移民の生活史を見直す必要があることを示しているのではないだろうか。

コナにおける日系宗教と死と葬祭にまつわる関係を整理すると，日系仏教信者はその所属宗派で葬祭を行い，民間信仰の信者は重複所属している仏教宗派で葬祭を行い，神道の信者は戦前では神道で葬祭を行なった者もあるが，多くは日系仏教の戒名を有している。新宗教の者はその一部が葬祭を日系仏教に委ねた可能性があることがわかった。

このような事実を捉えたうえで，移民の死と葬祭と埋葬から日系宗教，日系人の生活史を見直すために，これまでの筆者の墓地調査や戒名の分析の精度を高める作業とともに，寺院に残された過去帳などの葬祭の記録の調査，日系宗教の重複所属と葬祭の実態の把握などを，今後の課題として行なっていきたい。

注

[1] 日蓮宗ハワイ開教庁内百年史編纂委員会編（2003，13）によれば，オアフ島ホノルルに到着した高木行運がその旅装を解いたのはククイ・ストリートにあった千屋正信（高知県，1849-1924）宅であったという。千屋正信は 1903 年にハワイ大神宮を創建した千屋松恵の夫である。

[2] 前田（1999）によれば，ヒロの稲荷神社には伊賀松太郎と金森新六がそれぞれ奉祀した 2 社が記されているが，ヒロで発行された布哇植民新聞（1910 年 2 月 2 日）によればそれ以前にヒロ大神宮にも稲荷神社が祀られているので，それを加えるとヒロには戦前，稲荷神社が 3 社あったことになる。

[3] サトウキビ耕地の名称で，ハワイ島東部の中心地であるヒロからの距離がその名称となったもの。現在のプナ郡マウンテンビュー（Mountain View）近辺にあった。

[4] コナで商業を営んでいた山口県柳井出身の法月健助（1858-1945）は，金光教の信者として 1891（明治 24）年に妻のウタとともにハワイに移民している（金光教本部教庁 1995, 361。妻の名前をウラと誤記している）。法月健助はコナでは日本人村の「秋津（洲）村」を組織するほどの人物であった。法月健助の信仰の言葉が『金光教経典』（金光教本部教庁，1983）にある「金光大神御理解集 第二類」に「法月健助の伝え」として収められている（660 頁）。法月健助については注 6 も参照されたい。

[5] 本派本願寺布哇開教教務所文書部編（1918）による。しかし，当時のコナの日本語新聞「コナ反響」（1897 年 9 月 25 日）によれば，まず南コナのホルアロアに布教所をおき，その後に中コナのカイナリウに布教所を移したと思われる。また佐藤行信はコナのみではなく，当初は北接するコハラ地域と南接するカウ地域も布教の範囲としていた。これは広大なハワイ島のおよそ半分に及ぶ。

[6] 注 4 の金光教信者の法月健助と同一人物である。筆者の調査によれば，コナ本願寺に付設された墓地の区域の中央部分に法月の妻･ウタの墓がある。その墓標は細長い尖塔角柱型で「徳田歌子之心霊」「法月健助妻」「明治三十四年二月五日帰幽」と刻まれており，神式に準じたものと思われる。おそらくは妻の死去が契機となって墓地の設立を発起したのであろう。またホノルルのマキキ墓地にも「故徳田歌子之墓」があるが，その造立に関する詳細は不明である。なお，法月健助は 1905（明治 36）年に日本に帰国しており，1932（昭和 7）年に設置されたコナの金光教出張所（中島 1934）との関連はみられない。

[7] 武田光次郎はコーヒー栽培事業のかたわら熱心に大師信仰を捧げ，1924（大正 13）年に日本に帰国して四国の聖蹟を参拝し，高野山で長岡秀賢の徒弟となり僧名光道となってハワイに戻った（鳥取編 1927：129-130）。

[8] ハワイでの仏教寺院とそこに所属する信徒との関係は，日本の寺檀関係とは異なり，年会費を支払うメンバーと呼ばれる信徒により寺院ごとの宗教教団（非営利法人組織）が結成され，メンバーから選ばれた理事会のボードメンバーによって運営されている（井上 1985：2 を参照）。

[9] アメリカ本土の真言宗高野山大師教会（後の高野山米国別院）所属のボーイスカウト第 379 隊は，日米開戦

により日系人が戦時収容所に抑留されてもその内部で存続し，二世たちはそこから日系部隊に志願してヨーロッパ戦線に赴いた（早見 1974）。

[10] Abe（2013）ではコナには神社が北コナに 4 社，南コナに 1 社の計 5 社があったと述べているが，その名称と正確な位置を示していないため検証不可能である。北コナの 4 社のうち 3 社は本稿でも述べているケオプー大神宮，カウマルマル出雲大社，ホナロ稲荷神社と思われるが，もう 1 社は不明である。南コナの 1 社は新宗教で教派神道の金光教コナ出張所（1932 年開設，日米開戦時に閉鎖）と思われる。

[11] 佐藤常臣は，名前の類似性，同一の出身地から，柳田・赤木（1995）の研究対象者でハワイ島で出雲大社講社の集金を担当した佐藤常蔵と同一人物であると推定できる。また常臣の画家としての雅号は夏山と思われ，その佐藤夏山は 1935 年にヒロで亡くなっている（「日布時事」1935 年 6 月 19 日）。

[12] ハワイ語の綴りは Keopū でケオプーが近い発音であるが，当時の日本人はキヨプ，ケオプなどと発音，記述していた（注 22 を参照）。

[13] 伊賀は 1899 年の渡航であるので，通常は移民会社の斡旋によって労働契約を結んで移民労働者としての渡航が主流の「私約移民」の時である。しかし，伊賀は渡航費用の一切を自己負担して契約を結ばずに渡航した「自由渡航者」と慣例的に呼ばれる移民であった。この「自由渡航者」という呼称は 1900 年からの自由契約労働者の呼称である「自由移民」との区別が煩わしい。今後は「独立渡航者」とした方がその実態を的確に表現すると思われるので，本稿ではその名称を採用した。

[14] 現在の熊本県玉名郡長洲町で 1919（大正 8）年に松下松蔵が興した新宗教。松下松蔵の病治しが『主婦の友』昭和 6 年 11 月号に掲載され評判となった。『主婦の友』は戦前のハワイでも人気の雑誌であった。

[15] 祖神道本部（熊本県玉名郡長洲町）での聞き取りより。

[16] 筆者によるコナ在住の古老への聞き取りでは，地域住民による取り壊しではなく，FBI 関係者によるものであったという。その理由として，自分たちで建てた大切な神社を自分たちで壊しはしないからと述べた。

[17] コナの歴史資料を保存している Kona Historical Society に，浄土真宗僧侶による簡易的な祭壇を設営しての鎮めの儀式と思われる写真が残されている。

[18] その理由として，1889（明治 22）年に山口県周防大島に四国八十八ヶ所巡礼地方霊場が開創され，大師信仰が非常に盛んであったことをあげている（星野 1981）。

[19] 筆者の調査では，ハワイの真言宗寺院や大師堂のほとんどの本尊が弘法大師像である。日本では弘法大師像を本尊とする例は少ない。

[20] 講組織による地域的な金融組合の一種で，宗教的な色合いは本来はない。

[21] ケアラケクア地区は非常に範囲が広く小地区名では本願寺のあるコナワエナ（Konawaena，ハワイ語でコナの中心という意味。現在はこの地区がケアラケクアとなっている）から現在のキャプテン・クック（戦前の一時期まではこの地区がケアラケクアと呼ばれていた）までである。金剛寺があったのはキャプテン・クック地区である。この地名の変遷は設置された郵便局の名称によって地名が変わった例を示している。先に設立されたコナワエナ地区の郵便局がケアラケクアという名称で，次に現在のキャプテン・クック地区に設立された郵便局はケアラケクアの名称が使えず，郵便局が入っていたキャプテン・クック・カンパニーから名称が取られキャプテン・クック郵便局となり，やがて地名もキャプテン・クックとなった。

[22] 注 11 で述べたように，キヨプのハワイ語の綴りは Keopū であり，ケオプーが近い発音である。公開堂は公会堂の文字違いと思われ，地元では光明殿という呼称が使用されることが多い。中島（1934）では「公明殿」となっている。大師講の施設としては大師堂であるが，1911 年に創建されたケオプー大神宮と同じ場所にあり，1926 年に増改築されたときに公会堂として建てられた施設に共に設置されたため鳥取編（1927）では公開堂という施設名を使用していると思われる。

[23] 真言宗高野山派の大本山金剛峯寺にある真言宗布教のための総本部の支部の扱いで，海外の大師堂では破格の扱いと思われる。

[24] 鳥取編（1927）ではワヒアワとしているが，該当地区はハワイ語では Waiaha と表記してワイアハと読む。

[25] ワイアハの施設はその地区で商店を経営し珈琲栽培もしていた国武藤市（福岡県，1902 年に妻と共に来布，1877-1953）がその敷地を寄付し，組の施設として建てられた。

[26] この大師堂の建物はその後改築され観音堂として使用された。

[27] ハワイ語で Napo'opo'o と表記し，ナポオポオが近い発音だが，当時の日本人移民はナポポ，またはナポーポー，ナポポーなどと呼んだ。

[28] このようにコナでは曹洞宗大福寺と大師講，真言宗とは悶着したり，協力したりと複雑な関係にあった。これは宗旨からくるものではなく，前者のケースは曹洞宗のメンバーを増やすための観音信仰を優先させたと考えることができ，後者のケースは宗教者が不足している仏教宗派同士の協力のかたちであると考えることができる。事実,経典には共通のものがあり,現在も真言宗のメンバーの葬式を大福寺が執り行うことがある。

[29] ギャスパーは地名ではなくその付近に居住していた支配層の白人の姓である。正式な地名ではないが小地区の所在を端的に表すものであった。

[30] カハルウの大師堂は「組」が設立したものであったが，網崎梅吉（広島県，1909 年渡航，生没年不明）が堂守りとして大師堂に居住していた。

[31] 祖母（ばっちゃ）によく大師堂に連れて行かれた経験のあるアルフリーダ・フジタ（三世，祖父母は山口県周防大島出身，1926–2017）は，大師堂に行く日を日本語で「はつか（20 日）」と言った。大師堂に行くと子どもたちにはお菓子が配られそれが楽しみであったという。

[32] ホナウナウ大師堂（大師教会支部）は市村のコーヒー畑に建てられた。現在もその建物の基礎と思われる石垣が残っている。

[33] 濱崎好松（芳松）の三女もコナのホルアロアの安部千歳（二世・父母は福岡県出身，コナ出身の日本人移民の研究者 David Abe の祖父にあたる）に嫁いでいる。

[34] カマノマルは誤記と思われる。ハワイ語の表記は Kaumalumalu なので，正しくはカウマルマルだが，カマルマルともよく表記される。

[35] 3 月 21 日は弘法大師の入定の日で大師信仰にとって一番重要で特別な日である。

[36] 合わせて主な世話係の名前が 21 名文末に記してある。そのほとんどが北コナの中心地であるホルアロアとその字名地であるカウマルマルに居住する者たちであった。出身県別の内訳は広島県 10 名，山口県 8 名，熊本県 2 名，不明 1 名であった。

[37] 上田は，はなが 18 歳でハワイに来たという話から数え年で計算して，はながハワイに渡航したのを 1905（明治 18）としているが，渡航記録は満年齢で記録するので 1906 年が正しいと考える。

[38] 夫が得度した年を比定すると 1927 年となり，コナに弘法寺を開設した後に得度したことになる。

[39] 木谷法観の祈祷師としての活動は，ハマクア地域最北端のククイハエレの大師堂の建立の契機となり，また一度帰国し，再渡航してからはホノムのすぐ近くのカラワ（Kalaoa，カラオア）に真言宗醍醐派三宝院ハワイ出張所との大師堂を建立し，「法力」を使うこと，つまり祈祷をおこなうことを特徴としてホノム遍照寺の信徒を奪い対立した。木谷師の再帰国後は，弟子の村中美豊，高野山で修行し北米布教の経験のある沖村覚応のように移民から宗教者となった者たちがカラワ大師堂で評判の高い祈祷師として活動した。

[40] 中川（1954）に，1953 年に高野山真言宗管長であった和田性海がハワイ・アメリカを巡教した時に随行した学僧の中川善教がその時の様子を日記風に著したもの。

[41] 三十三観音供養の本来の縁日は 3 月 17 日であるが，大福寺ではその日にちに近い日曜日の午前中に行われている。これも日曜日を休日とする西洋文化への適応の一例である。

[42] 観音堂には齋藤實元首相から 1936 年 10 月に送られた布哇観音が祀られている。これは実弟の齋藤省吾が 1896 年にコナで 29 歳の若さで亡くなったことへの供養と，1935 年に官約移民 50 周年を記念するものであった。しかし，齋藤實はその年の 2 月に二・二六事件により亡くなっているので公式の寄贈者は夫人の齋藤春子となっている。なお，齋藤省吾の死がコナにおける初めての日本人墓地の開設の契機となった（平川 2020）。

[43] 曹洞宗の幹部メンバー（山口県出身）が経営していた商店の戦前の帳簿に,「庚申講賽銭, 0.25（ドル）」（1928 年 3 月 21 日）「庚申講水代, 10.00（ドル）」「庚申講肴代 井川拂, 9.45（ドル）」（ともに 1928 年 11 月 16 日）の記載がある。肴代の支払い先の「井川」とは，大福寺の近くで鮮魚店を営んでいた井川栄蔵と思われる。

[44] エンブリーは Mrs. H は大福寺の信徒で御詠歌を教える役目をしていたと述べている。これを参考にして判断すると，Mrs. H はコナでの曹洞宗布教の最初の場所となった商店の夫人（1877?–1945）である。

[45] 彼女の二男からの聞き取りによる。今も彼の自宅の仏壇には母親が信仰治療に利用した大師像が祀られてい

る。なお，彼の家は浄土真宗門徒である。

[46] 山口県周防大島の小松村出身の佐藤一郎経営の旅館。奇しくも同時期に佐藤一郎はハワイに来ていた高野山真言宗の和田管長一行の世話もしていた。ちなみに天照皇大神宮教の現在のホノルル道場は小松屋旅館のグループ企業の所在地跡にある。

[47] この教えは現在でも行われていることを筆者が山口県田布施町の本部を訪れた時に確認した。

参考文献

淺井宣亮 2010．20 世紀初頭のハワイにおける曹洞宗．禅研究所紀要 39：314-279．愛知学院大学禅研究所．

移民研究会編 2008．『日本の移民研究　動向と文研目録Ⅱ 1992 年 10 月-2005 年 9 月』明石書店．

石井研士・藤井健志 1988．新宗教における墓・葬儀の問題．藤井正雄編『仏教民俗学体系 4 祖先祭祀と葬墓』411-429．名誉出版．

井上順孝 1981．異文化内状況と神社神道．柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教―ハワイ日系人宗教調査報告書―』96-136．東京大学宗教学研究室．

井上順孝 1985．『海を渡った日本宗教―移民社会の内と外―』弘文堂．

上田喜三郎 1991．ハワイ日系人の生活史（ライフ・ヒストリー）（11）三年したら帰るつもり―寺内はな氏の生活史．太平洋学会誌 52：11-14．太平洋学会．

曜日蒼龍 1889．『布哇紀行』私家版．

金光教本部教庁編 1983．『金光教経典』金光教本部教庁．

金光教本部教庁編 1995．『金光教経典 人物誌』金光教本部教庁．

近藤隆二郎 2005．ハワイ日系人社会における写し巡礼地の成立と変遷．ランドスケープ研究 68-5：435-438．

真田孝昭 1981．コナにおける日系宗教と日系人の宗教帰属．柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教―ハワイ日系人宗教調査報告書―』24-45．東京大学宗教学研究室．

島田法子 2001．20 世紀初頭のハワイにおける仏教開教と文化変容―『同胞』に見られるアイデンティティの変化を中心に―．戸上宗賢編『交錯する国家・民族・宗教―移民の社会適応―』179-211．龍谷大学社会科学研究所．

曹洞宗ハワイ開教総務部編 1978．『曹洞宗ハワイ開教七十五年史』ハワイ曹洞宗協会．

高橋典史 2014．『移民，宗教，故国―近現代における日系宗教の経験―』ハーベスト社．

高山秀嗣 2011．ハワイ初期開教と九州における真宗ネットワーク．年報日本思想史 10：1-14．

常光浩然 1971．『布哇仏教史話―日本仏教の東漸―』佛教伝道教会．

天照皇大神宮教編 1998：紀元 53 年．『大神様海外ご巡教　第 1 巻』天照皇大神宮教．

天照皇大神宮教ハワイ州支部編 1975．『大神様ご足跡と支部のあゆみ』天照皇大神宮教ハワイ州支部．

鳥取密明編 1927．『創立満十周年に際して』真言宗布哇別院．

中川善教 1954．『米布に使して』高野山出版．

中島陽 1934．『コナ日本人實情案内』中島陽．

中牧弘允 1986．『新世界の日本宗教　日本の神々と異文明』平凡社．

中牧弘允 1989．『日本宗教と日系宗教の研究　日本・アメリカ・ブラジル』刀水書房．

西山茂・藤井健志 1981．ハワイ島日系人社会における天照皇大神宮教の伝播と展開．柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教―ハワイ日系人宗教調査報告書―』46-67．東京大学宗教学研究室．

早見勝一 1974．『高野山米国別院五十年史』高野山米国別院．

百年史編纂委員会編 2003．『日蓮宗ハワイ開教百年史』日蓮宗ハワイ開教庁．

平川亨 2020．ハワイ島コナ地域の日本人墓地と移民コミュニティ．駿台史学 168：25-48．

本派本願寺布哇開教教務所文書部編 1918．『本派本願寺 布哇開教史』本派本願寺布哇開教教務所．

本願寺布哇日曜学校連合本部 1933．『宗教の概説』本願寺布哇日曜学校連合本部．

星野英紀 1981．ハワイにおける大師信仰の展開と真言宗寺院の活動．柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教―ハワイ日系人宗教調査報告書―』137-153．東京大学宗教学研究室．

前田孝和 1999．『ハワイ神社史』大明堂．

松村幹男 2007.『松村正穂（霊光）―八十年の足跡―』私家版.
森岡清美 1981. 立正佼成会ハワイ教会の形成と展開.『ハワイ日系人社会と日本宗教―ハワイ日系人宗教調査報告書―』3-23. 東京大学宗教学研究室.
守屋友江 2001.『アメリカ仏教の誕生―二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容―』現代資料出版.
守屋友江 2008. 戦前のハワイにおける日系仏教教団の諸相. 立命館言語文化研究 20-1:115-128. 立命館大学.
柳川啓一・森岡清美編 1979.『ハワイ日系宗教の展開と現況―ハワイ日本人宗教調査中間報告―』東京大学宗教学研究室.
柳川啓一・森岡清美編 1981.『ハワイ日系人社会と日本宗教―ハワイ日系人宗教調査報告書―』東京大学宗教学研究室.
柳田利夫・赤木妙子 1995.『ハワイ移民佐藤常蔵』慶応通信.
Abe, D. 2013. The Japanese Shinto Shrines in Early Issei: A Case Study in the Kona Coffee Belt Japanese Community. 金城学院大学論集（社会科学編）9-2：48-60.
Embree, J. F. 1941. *Acculturation Among The Japanese of Kona, Hawaii*. American Anthropological Association.
Lucas, P. F. N. 1995. *A Dictionary of Hawaiian Legal Land-Terms*. Native Hawaiian Legal Corporation.
「コナ反響」, 1897 年 9 月 25 日, 1917 年 4 月 19 日.
「日布時事」, 1909 年 11 月 25 日, 1935 年 6 月 19 日.
「布哇植民新聞」, 1910 年 2 月 2 日.